

発動機、ポンプ、樹木粉碎機 「農業立県」を技術力で支える

山形県・山形市誘致企業第1号 (株)カルイ

「本社は一級工作機を設備し全技術陣の総動員を為し之が研究を進め以って今日の製品を産出せり。カルイ発動機製造販売元 東北振興山形発動機株式会社」。1940(昭和15)年8月10日付『中外新聞』に掲載されたカルイ発動機の広告だ。「お客さまに嘘をつかないメーカーでありたい」「地元に着目して深めていきたい」。発動機、ポンプそして粉碎機と、農業県である本県とともに戦前から今日まで歩んできた山形県・山形市の第1号誘致企業を紹介する。

愛媛県伊予三島から山形へ

発祥の地は、香川県と境を接し瀬戸内海に面した愛媛県伊予三島(現在の四国中央市)である。代々鉄砲鍛冶を生業(なりわい)としていた。大正に入り現社長高橋和成氏の祖父律氏が、空冷式石油発動機を開発し販売を開始した。当時の農耕作の動力は牛、馬であり、発動機を使って



の農作業は画期的なものであった。港に面した工場は大規模なもので、販売先は、地元はもとより遠くは当時日本領であった樺太に営業所を構えるほどであった。

加えてその発動機は1921(大正10)年、農商務省主催の第1回農業用石油発動機比較試験において、他の国内外の製品を抑えて見事最高位で入選した。馬力に対してその重量が最も軽く、扱いやすかったことが評価されたもので、今日の社名「カルイ」は「軽い」に由来する。

四国のメーカーと本県とのつながりは、1939(昭和14)年にさかのぼる。戦時下における軍需品工場の誘致を目指していた山形市は産業振興会を結成し誘致運動を開始。東京・板橋に1万坪の工場敷地を求め移転を準備していた高橋製作所(カルイの前身)が新たに会社を創設する、との情報を得て働き掛け誘致に成功した。旧産業道路に面した鉄砲町地内に敷地を斡旋。こうして本県、

本市誘致企業第1号として、食糧増産のための農業用発動機製作工場(社名「山形農業発動機株式会社」)が誕生した。

国内で初、樹木粉碎機開発

以来、75年。同社の歴史は時代と共に変遷し、また主力製品も「塗装がまだ乾ききらないうちから業者が持つて行った」ほど飛ぶように売れた発動機から農業用ポンプ、そして現在の樹木粉碎機へと移ったが、独自開発の技術力は引き継がれ、農業ハウス用スプリングクレーなどを使用されているキャナルポンプ(製品名)は科学技術長官賞を受賞。アメリカへの視察でヒントを得た樹木粉碎機は他のメーカーに先駆け国内で最初に開発した。

粉碎機は大型、小型用はじめ貝殻竹、生ごみ等対象に応じて20数種類に及び、国内に大きなシェアを占め今日に至っている。

(株)カルイ 創業1916(大正7年)。昭和14年に愛媛県伊予三島より山形市に移転し山形農業発動機(株)として発足。農業用石油発動機、農業用ポンプ、樹木粉碎機を開発製造・販売。高橋和成代表取締役社長。本社〒990-12351 山形市鑄物町46-1。☎023-645-5710。

(写真右上) 自社敷地内で樹木粉碎機のテストを繰り返す。右が高橋社長。(同右下) ユーザーの声に耳を傾け独自の開発を続ける。(左上) 2代目社長律氏とカルイの社名の由縁となった発動機

◇ 大学を卒業後、首都圏の会社で4年間の勤務を経て、4代目社長として経営に当たる高橋代表取締役社長に経営方針などについて聞いた。
「樹木粉碎機の開発は昭和50年とお聞きします。」

高橋社長 当時から果樹農家や造園業者は剪定した枝の処理に頭を悩ましていました。1997(平成9)年の京都議定書において二酸化炭素の排出量が厳しく規制され、従来の燃やして処理する方法で対処することが難しくなり、粉碎機が一躍注目を集めました。伐採した枝をチップ、さらには粒状にするため容量は7割近く圧縮され処分費用の削減に寄与するからです。また、腐葉土化を推し進め、肥料としての活用にも道を開きました。当社はかねてより、有機農業の先駆的存在で知られる東京都・世田谷区の大平農園の協力を得て用途に応じた粉碎機の開発・改良に取り組んでいました。

顧客の声を社内で共有

「顧客本位ということを社是でうたっています。」

高橋社長 製造業はとかく作り手が「きつところ」という製品をユーザーは望んでいる」という思い込みに陥りやすい。大切なのはまず顧客の声に耳を傾けることです。日々の営業や展示会で直接聞いた声を社内で共有し、議論を重ね開発・改良に取り組むことが基本ではないかと考えます。開発は当然ながらモノづくり企業の生命線です。しかし一方で一度成功すると、そこに固執し変化を軽視しがちではないかと思う。ユーザーの要望に答えられなくなり、気が付いたらいつの間にか他社に追い越されてしまっている、という状況になりかねません。

本格的に粉碎機を手掛けているのは当社のほかにもあります。競争することは決して悪い面ばかりではありません。相手に負けないようにするにはどういった取り組みが必要なのか。社員が一体となって考えなければなりません。そこから新たな製品の開発へのヒントが得られます。――今後の展望などについてうかがいます。

高橋社長 ひとつは果樹王国山形において粉碎機をもっと普及させたいということ。また、県は村山地域内ものづくり企業と産学官金連携の「村山インダストリー倶楽部」を創設し「医療機器」「環境」「工農連携」など部会ごとに研究会を発足させました。当社も農業と連携し新技術及び製品の開発を目指しております。ぜひ実現させ山形に恩返しができると思っています。